障害児と親子関係

池　田　一　郎*

The Relationships between Parents and Handicapped-children

Ichiro IKEDA

(1973年9月27日受理)

1. はじめに

Personality の研究において遺伝的要因と環境的要因の輻輳作用を重視しなければならないことはすでにStern, W の指摘しているところであるが，現在は遺伝的 apriori なものよりも後天的，獲得的に形成されるものに興味がむけられてきている．さらに後天的，獲得的なもののなかでも幼児期の生活経験，さらにその背後に存在する家庭的条件が重要視されている．両親のこどもに対する態度，家庭の雰囲気がこどもの personality に大きい影響を与えることについては多くの研究が行なわれている．例えばSpitz, R. A は psychoanalysis の立場から親子関係における人間関係に関して乳児の1年間の観察を行なっている[1]．また Newell は臨床的な研究で親の態度や取り扱いがこどもの行動にかなりの影響をおよぼしているとしているし，Zimmermann は25名の幼児の調査の結果，過度に保護された場合も無視された場合もともに攻撃的な傾向があらわれるとしている[2]．Mussen, P. H も乳幼児の社会的学習が最初に家庭においておこなわれ，その最初の体験である母親との関係が他人に対する態度や期待を規定する要因となっていることを述べている[3]．

親の態度を一定の規準にしたがって分類して，それがおよぼすこどもの性格を調査したものが多くみられる．例えば Radke, M. J は両親のこどもに対する態度をとらえる項目として

(1) 民主的か専制的か
(2) 制限が厳格かゆるやかであるか
(3) 叱責が厳重か寛大か
(4) 親子関係が親密か疎遠か

を挙げている[4]．Symonds, P. M は personality 形成の場としての家庭環境を親子間の愛情関係の問題としてとりあげ，拒否的—保護的，支配的—服従的の二要因の直交軸の座標として構成されることを説いている[5]．稲田はこの Symonds の考えかたをとりいれて支配—服従，保護—拒否の二要因についてそれぞれの質問項目を設定し，面接による親の態度の測定を行なっている[6]．

これらの考えかたからして，親子間のありかたがこどもの personality の形成におよぼす影響のきわめて大きいことがわかっている．この意味から学校では能力感 feeling of adequacy を，家庭では安定感 feeling of security をというこどもたちの精神的健康指導上の原則[7]が引き出されるのである．

障害児に通常見出される personality のさまざまな歪みの問題も，このような観点から

*社会科学研究室

親子関係に起因するところが大きいのではないかという仮説から出発し，障害児の両親がそれぞれのこどもにどのような態度で接しているか，そしてそのような態度はいかなる理由によってとられるのであるかを考えてみた．

2．方　　法

対象とする障害児として聴覚障害児と肢体不自由児，比較群として同年令の正常児をとりあげた．

大阪府下聾学校　6才児25名

大阪府下養護学校（肢体不自由児）6才児15名

大阪府下小学校（都市地域），奈良県下小学校（農村地域）1年生45名

以上それぞれの児童とその両親とした．

標本集団の全体的傾向を把握し，同時に純粋に聴覚の欠陥あるいは肢体の不自由なもののみを対象とするために田中B式知能検査によるIQの測定を行なった．ただし聴覚障害児と一部の肢体不自由児には instruction を与えることがかなり困難であったため[8]，Goodenough の描画テストを使用した．

田研式親子関係診断テスト（両親用）によって調査し，特異な結果を示したケースについては直接面談によった．

3．結果と考察

知能検査の結果によると第1表のように正常児にあっては標準よりも高く，聴覚障害児および肢体不自由児では標準よりかなり劣っている．肢体不自由児に脳性マヒを起因とするものが多いと思われるのでこのような数値がでたのであろう．もっとも前記のように知能検査の種類が異っているため，数値を直接比較することには疑問がある．性差による有意差や，正常児における都市部と農村部の有意差はみられなかった．

第1表　知　能　検　査

平均 SD ＼ 性	m	f	t
正　常　児 N＝45	X 123.8 S 19.1	X 119.9 S 17.2	X 121.7 S 18.1
聴覚障害児 N＝25	X 107.2 S 18.1	X 108.3 S 16.0	X 107.8 S 17.3
肢体不自由児 N＝15	X 95.1 S 19.3	X 97.2 S 16.8	X 96.3 S 17.9

これらの結果，正常児には問題がなく，聴覚障害児に2例，肢体不由画児に4例の測定不能およびIQ 60以下が発見されたので対象から除外し，正常児において都市部と農村部の区別はしなかった．

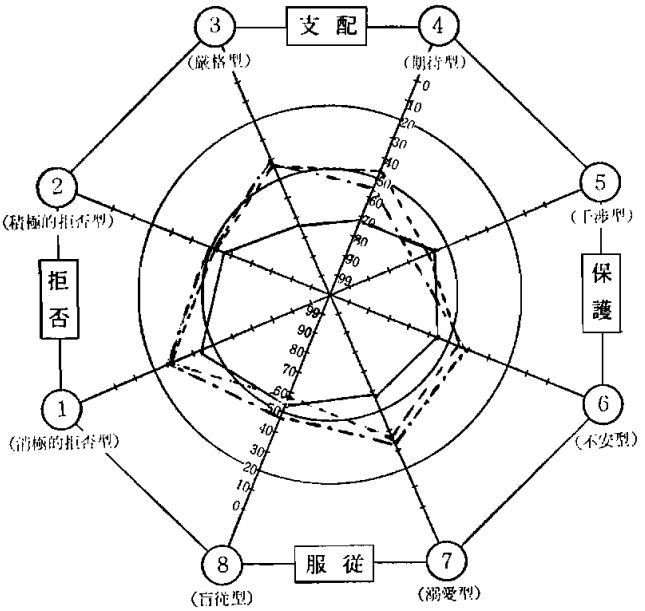
それぞれの児童を通じて品川不二郎，同孝子著親子関係診断テスト（両親用）を持帰らせて記入，回収する方法をとった．回収率は極めて良好であったが，父親または母親のみの記入の回答が若干あった．その結果はつぎの第2表，第3表である．

両親のこどもに対する平均的態度・% ile

これを診断ダイヤグラムにしたものをつぎの第1図，第2図に示す．

第2表　父　親

項目 / 区別	拒否		支配		保護		服従		矛盾不一致	
	消極的拒否	積極的拒否	厳格	期待	干渉	不安	溺愛	盲従	矛盾	不一致
正常児 N＝45	44	52	72	71	64	54	55	56	50	48
聴覚障害児 N＝22	28	49	41	54	71	41	39	48	36	44
肢体不自由児 N＝11	29	51	45	52	60	45	38	58	40	49



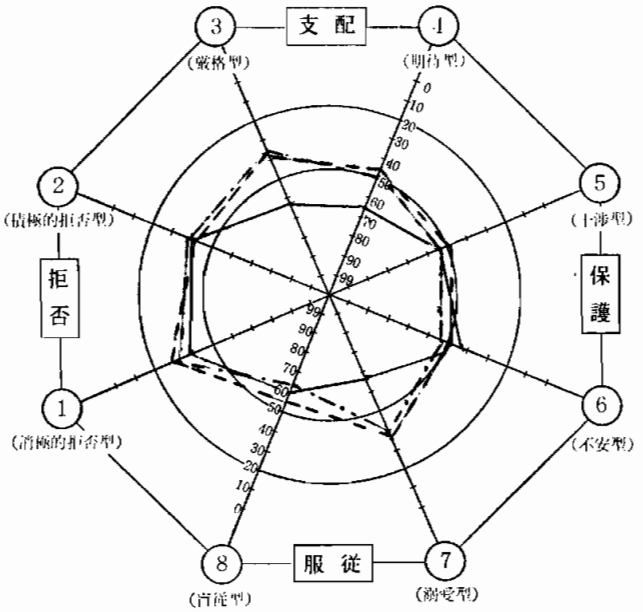
第1図　父　親

型	種別	%
9. 矛盾型	正常児	50
	聴覚障害児	36
	肢体不自由児	40
10. 不一致型	正常児	48
	聴覚障害児	44
	肢体不自由児	49

——— 正常児
—·—·— 聴覚障害児
- - - - 肢体不自由児

第3表　母　親

項目 / 区別	拒否		支配		保護		服従		矛盾不一致	
	消極的拒否	積極的拒否	厳格	期待	干渉	不安	溺愛	盲従	矛盾	不一致
正常児 N＝45	38	35	62	65	55	45	59	60	54	48
聴覚障害児 N＝22	29	39	37	48	52	53	39	64	37	49
肢体不自由児 N＝11	28	41	36	45	51	51	37	55	36	47



第2図　母　親

型	種別	%
9. 矛盾型	正常児	54
	聴覚障害児	37
	肢体不自由児	36
10. 不一致型	正常児	48
	聴覚障害児	49
	肢体不自由児	47

——— 正常児
—·—·— 聴覚障害児
- - - - - 肢体不自由児

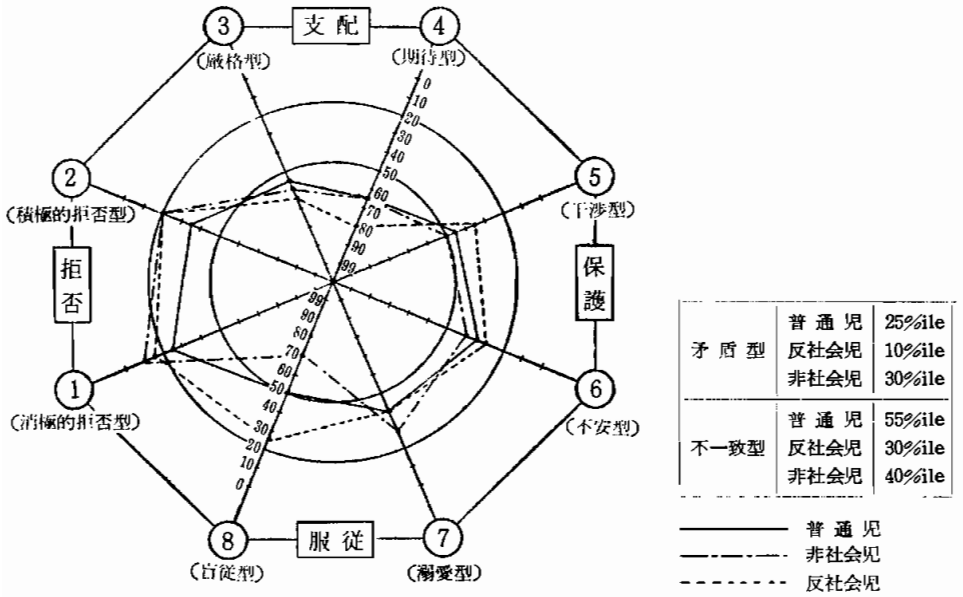
正常児においては消極的拒否が準危険地帯に属しているのみであるが，障害児では消極的拒否，積極的拒否，溺愛，矛盾が準危険地帯にある．特に溺愛型と厳格型において，溺愛型では障害児は30% ile 台，厳格型では30～40% ile 台となっており，正常児群との差が著しい．これは障害児の両親のこどもに対する態度が好ましくないことを示している．

同じ検査を幼稚園年長児98名に実施し，そのなかから問題児として非社会児，反社会児を抽出して普通児と比較した宮脇・原の報告[9]によると第4表のようになっている．

第4表　問題児の母子関係（母親の幼児に対する態度）　（t.S.）

群	平均 DS 項目	消極的拒否型	積極的拒否型	厳格型	期待型	干渉型	不安型	溺愛型	盲従型	矛盾型	不一致型
反社会的幼児	$\bar{X}$	15.0	14.2	14.6	17.1	13.2	12.1	17.3	13.8*	13.2*	15.3
	S	2.4	3.3	2.2	1.7	3.3	3.5	3.5	2.3	2.7	2.8
非社会的幼児	$\bar{X}$	15.5	14.1	14.1	15.9	14.5	13.0	16.5	16.9	15.9	16.4
	S	3.0	3.8	2.9	3.1	2.7	3.4	4.0	1.8	2.7	3.4

＊　P<0.05



第3図　母子関係

母子関係は第4表にみられるように反社会的幼児では盲従型と矛盾型に5％水準において普通児との有為差があり，またダイヤグラムに示されるように拒否―保護の軸で反社会性幼児の母親のこどもに対する態度の悪さがみられる．ただし父親の回収率が悪いため計画は変更され，データは母親のみのものとなっている．全児童にわたって矛盾型が極めて悪く，特に反社会性児にあっては絶対危険状態となっている．また盲従型において反社会性幼児では25％ ile の低さを示していることは注目される．

つぎに，正常児と障害児の差の特に大きい厳格型と干渉型の下位検査について考えてみる．

(1)　こどもの身の回りのことを黙ってみていられないで干渉しますか—第5表.

区別＼問い	いいえ	はいときどき	はいいつも
正常児	12	20	0
聴覚障害児	7	15	10
肢体不自由児	1	7	6

(2)　物ごとをきめるときこどもと話し合わずにきめますか—第6表.

区別＼問い	いいえ	はいときどき	はいいつも
正常児	16	15	1
聴覚障害児	11	7	13
肢体不自由児	2	4	10

(3)　こどもにこづかいを与えていますか—第7表.

区別＼問い	はい	はいたまに	いいえ
正常児	26	6	0
聴覚障害児	5	10	15
肢体不自由児	2	5	9

(4)　礼儀・規律・勉強などをやかましくしつけていますか—第8表.

区別＼問い	いいえ	はいかなり	はいとても
正常児	14	17	0
聴覚障害児	4	26	2
肢体不自由児	3	10	1

(5)　なにごともこども本位にだけ考えますか—第9表.

区別＼問い	いいえ	はいたいてい	はいいつも
正常児	20	15	7
聴覚障害児	4	8	15
肢体不自由児	2	7	6

これらの回答のなかで，正常児と著しく異なった結果を示した下位検査について障害児の親を at random に面接した．その代表的な回答を要約すると以下のようである．

(1)　基本的生活習慣の確立がようやく可能である程度のこどもにとうてい自分でさせられないという能力のなさからくる過保護的態度がみられた．(2)　聴覚障害児においては6才児という年令から語彙不足によるコミュニケーションの不可能を理由とするものがもっ

とも多かった．(3) 社会経験の不足による能力欠除とするものと，外部に出して他人の好奇の目にさらされたくないとするものが多い．これは植原の示しているように[10]，障害児の親の対外姿勢にあらわれた閉鎖的態度や消極的態度が50%を起していることをみても，障害児をもつ親の精神的負担の重さが感じとれる．(4) 障害児の母親は常にこどもに付き添って登校し，他の母親や教師と接触することが多く，競争心，気兼ねなどが多い．また家事を祖母その他に托さねばならないのでできるだけこどもについてきびしいしつけをするという回答が多い．(5) こども本位ということを障害児の両親はどのように受けとめているのであろうか．面談の結果ではこどもの人格，能力をほとんど認めていない傾向がみられる．すなわち，ただかわいそうである．親がこのようなこどもを生んだのであるからこどもにつくすのは当然であるといった一種の贖罪意識が強く感じとられた．

このような結果をみるとき，障害児の両親に通ずるどうせ駄目なこどもであるという諦観的な態度がみられる．このような態度が障害児に対する拒否，溺愛の型を引きおこす．障害児への溺愛は必然的に overprotection を引きおこし，こどもを親に過度に依存させ，盲従型の典型的なものとしてこどもの needs 以上の盲目的な愛情が強くあらわれることによって情緒の発達が歪曲され，正常な personality の発達を阻害する．これは Myklebust も指摘するところである[11]．袴田は TAT（名大版）を聴覚障害児に実施した結果として親への過度の依存（親からの分離不安），自立の困難の不安が著しいことをあげている[12]．親の側からの保護とこどもの側からの依存が強固に交錯しあっているのである．

聴覚障害児の frustration 実験では tolerance が著しく低く，衝動的，爆発的な行動が示され，自我構造の未分化なことが示唆されている[13]．溺愛型—服従的態度を示すこどもの反応が frustration tolerance の低さを示すことが明らかである限り，障害児に対する親の態度が障害児の frustration-tolerance を二次的に低下させているといってよい．

Cockburn, J. M は脳性マヒ児の家庭の四分の一は愛情，養護，障害の理解などの調査の結果，その身体的，精神的制約についての理解や欠除，両親の支援の欠除，独立心の抑制等において欠陥をみとめている[14]．

障害児の両親はまた，下位検査4にみられるように矛盾した態度を示している．つまり極めて over-pootection でありながら同時に極めて厳格な躾をしていることである．ただその厳格さがこども自体を理解したためではなく，単なる競争心や見栄を背景とした親自身のためのものであるところに問題が伏在している．

障害児の知的，身体的発達の無限の可能性という楽天的な思想を生み出したソビエトの欠陥学[15]はこれからの障害児教育の方針を示しているが，同様の意味において障害児は「障害をもつ普通児[16]」という観点に立脚するかぎり，障害児の両親は障害児であるが故にではなく，普通児であるが故にその養育態度を規定してゆかねばならないのである．障害児教育は，こどもの補償教育，代償教育とともに両親にいかにこどもの障害を受容させるかの問題である．

文　献

1. Spitz, R. A；Die Entstehung der Ersten Objektbeziehungen-Direkte Beobachtungen an Säuglingen wärhrend des ersten Lebensjahres（古賀行雄訳）1962.
2. 津留　宏；家族関係の心理.
3. Mussen, P. H, Conger, J. J, & Kagan. J. S；Child development and personality, 1963.

4. 児童心理学，教師養成研究会教育心理部会.
5. Symonds, P. M；The dynamics of parent-child relationships, 1949.
6. 稲田準子；児童の性格と親子関係，児童心理 7—9, 1953.
7. 依田 新；教育心理学，有信堂.
8. 池田一郎；ろう児の教育心理学的研究実験序説抄，1949.
9. 宮脇二郎，原 和子；幼児の社会性と母子関係の関連性，聖徳学園女子短期大学紀要，1969.
10. 植原 清；教育心理ジャーナル Vol. 6, 1970.
11. Myklebust, H. R；Your Deaf Child—guide for parents, 1967（佐野文子訳）
12. 袴田正克他，TAT 主題分析，日本心理学会第22回大会発表論文集.
13. 伊藤隆二他；心身障害児教育の原理，1970，福村出版.
14. 同上.
15. 飯野節夫；ソビエトの障害児教育，日本文化科学社，1967.
16. 辻村泰男；普通児・中間児・障害児，文部時報1094号，1968.

Summary

The personality of handicapped-children can not be thought properly without parents-children relations. On this standpoints, this study was made by investigation of the handicapped-children and their parents with direct observation and questionaire.

The results are summarized as follows ; the relationships between parents and handicapped-children differ from those between normal children and their parents. Generally it seems that parents of handicapped-children take place over-protect for their children, and such attitude injures them.